

保存科学研究集会

埋蔵文化財センター

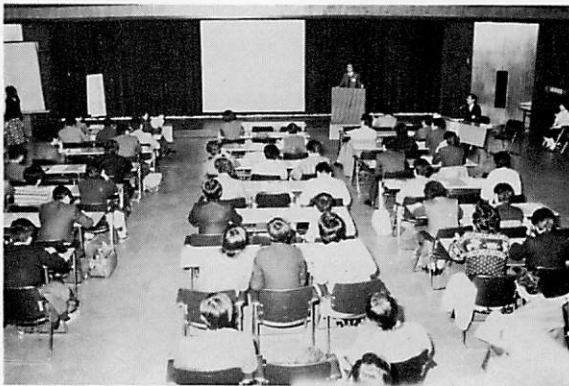
保存科学研究集会は、1985年3月19・20日の2日間にわたり、奈良国立文化財研究所・講堂で開かれた。保存科学関係担当者をはじめ、関連諸分野から約60名が参加した。

発掘調査に伴う遺跡・遺物の保存科学的な問題が今日ますます多様化し、かつ、高度な専門技術が要求されるようになってきた。今回は、保存科学の現状と問題点について、研究成果を報告・討議し、さらにお互いの情報を交換することを目的とした。限られた時間内で最大の効果をあげるため、研究発表(7件)に加え、ポスターセッション(9件)や保存科学関連機器検討会を設けるなど、新しい企画を盛りこんで行われた。

第1日目は、基調報告(沢田正昭)に続き、出土漆製品の顕微鏡観察から製作の技法を推定し、保存処理の基礎データをなす報告(永島正春)、出土木材の各種保存処理法と強度および寸法安定性に関する報告(増沢文武)、高松塚古墳の修復に関する報告(増田勝彦)、岩石に対する減圧含浸工法の効果(秋山隆保)などの研究発表が行われた。さらに、ポスターセッションでは金属製遺物のサビと保存(秋山隆保)、木製品の保存処理に関する最近の問題(内田俊秀)、中国軍吏陶俑の修復保存(岡田文男)、植物質繊維加工品の保存処理(中川正人)、正倉院宝物の非破壊分析(成瀬正和)、60万年前の水浸出土木材の保存(橋本清一)、中性子ラジオグラフィー(増沢文武)、動植物遺体の保存(山口誠治)、石造物の保存(山田拓伸)など幅広い研究成果が紹介された。

第2日目は、赤外線の利用による漆紙、墨書、装飾古墳壁画等の研究(三浦定俊)、象嵌遺物の表出技法の研究(西山要一)、開陽丸や新安沖の海底出土遺物を具体例にあげた、海底出土遺物の保存処理(沢田正昭)について報告された。続いて、保存科学関連機器検討会が行われ、最後に総合討議が行われた。

総合討議では、漆製品の保存処理、遺跡の露出保存の問題などを中心に活発な意見が交換さ



保存科学研究集会講演会

れた。特に、岩石の硬化方法とその効果について、総合的な観点から研究をすすめるべきであるとの意見が述べられた。また、わが国では、緒についたばかりではあるが、海底出土遺物の保存処理、特に脱塩処理に関する、より効果的な方法の開発に強い関心が寄せられた。保存科学の、今後ますますの研鑽を合言葉に幕を閉じた。

(沢田正昭)